

開かれた教会の百四十年 何をを目指すのか

宣教百四十年記念実行委員会委員長 フランシス菊池邦香



教の影響を受けた人たちが、女性の人権保護のため活動し、非戦平和主義を唱えました。これらの人道的な働きによってキリスト教は徐々に日本社会に認められてきました。

日本に初めてキリスト教が入ってきたのは1549年、フランシスコ・ザビエル宣教師によりです。徳川幕府の禁教令で激しく弾圧された時もありましたが、1873(明治6)年にキリシタン禁制が解かれキリスト教宣教は自由化されました。

しかし徳川幕府による邪教観が日本社会に蔓延し、昭和期の軍国主義的国家体制下まで強く偏見をもたらせました。それでも明治期のキリスト教は、教育、医療、福祉などに貢献しました。富国強兵政策下で取り残された弱者救済にもキリスト者は力をいれ、被差別部落解放運動、孤児院設立、知的障害者施設やハンセン病及び結核医療施設等の事業も手がけました。また社会的弱者の立場に立ち多くのキリスト者やキリスト

そうした歴史の中で1859(安

政6)年米国聖公会からチャニング・ムーア・ウィリアムズ宣教師が来日し、今の日本聖公会の基礎を築き初代主教となりました。ウィリアムズ主教の初来日後1878(明治11)年、米国聖公会が東京以外の最初の地方宣教を川越から始めます。この宣教は田井正一伝道師によるものでした。後に司祭になった田井正一師は日本人最初の聖公会の聖職者でもあります。1901(明治34)年、川越に埼玉県最初の幼稚園・宇

気良幼稚園(後の初雁幼稚園)を開設しました。教会は川越町を数回移動し、今の聖堂は川越の大火(1893明治26年)後、1921(大正10)年に現在地に赤煉瓦の聖堂として竣工しました。翌年川越町は埼玉県内で初の市制が施行されます。1923年には関東大震災に遭い、礼拝堂は数々の損傷を受けました。今年から3年後の2021年には聖堂

聖別100年と初雁幼稚園創立120年という記念の年を迎えます。

戦中は短期間ですが日本基督教団に合同し、「日本基督教団川越聖愛教会」と名前を変えました。軍事政策に抗うことをせず、戦後日本聖公会に復帰し元の名前に戻りました。神による平和をこの世に宣教することができなかつた一時期の過ちを反省し、悲しみを乗り越え戦後を迎えることになるのです。

川越の地にキリスト教の宣教が始まってから140年の間、教会には多くの活動が芽生え、聖書を学ぶ会、婦人会、青年会をはじめ様々な活動を通して、信徒は精神的に支えられました。青少年たちは希望の道を歩み、成長してきました。幼稚園では多くの卒園児を世に送り出し、保護者たちとの繋がりが広まりました。教会と附属幼稚園が合同でバザーを開催したり、最近ではホームページなどで教会での結婚式を希望する方やクリスマスイヴ礼拝に一般市民の参加も増え、教会の認知度も上がってきました。さらに、日本や世界の関係機関との交流も多く、他者との協働の喜びを経験してきました。

幼児教育では3歳未満の幼児の保育も対象となりました。乳幼児の保育を必要とする子どもを抱える家庭が増え、その人たちをも対象に宣教の道は開かれていきます。来年4月

からは幼稚園は「認定こども園・初雁幼稚園」に変わります。

幼稚園の保護者や卒園児、さらに、信徒の縁者関係者以外の方々の受洗者も最近徐々に増えています。宣教百年を迎えた40年前に「福音をみんなのものに：開かれた教会の第二世紀に向かつて」と心新たにしたいその結実を見るようです。

開かれた教会を目指し、どなたでも交わられる教会であり、傍らに置かれた方や弱い立場に追いやられている方をも覚えて、その方々と共に生きることが教会の姿であると私たちは学んできました。そうした認識を踏まえて今年の総会では昨年に続きしてヨハネによる福音者20章19節「あなたがたに平和があるように」を聖句として、**「多文化共生社会へ」**を宣教テーマに掲げました。実りある記念の年としたいものです。

今年の記念企画は次の通りです。

- ①感謝礼拝 宣教140年記念・田井司祭生誕170年記念
 - ②学び シンポジウム・講演会・パネルディスカッション・韓国研修旅行・パネル展・コンサート
 - ③協働 草津家族キャンプ・レセプション・日曜学校及び幼稚園保護者との交流・特別バザー・青年活動
- *詳しくは「宣教140年記念実行委員会ニュース」をご覧ください。